地域と一体化し、共に復興事業を推進してゆきたい

CSR『企業の社会的責任』活動と掲げてしまうと、堅苦しく感じますが、吉浜道路工事連絡協議会の姿勢は、当初から『地域と一体化し、共に復興事業を推進してゆきたい』でした。

地域にとっては、初めて見る大型プロジェクトへの期待感と震災からの復興への思い。現場サイドとしては、その大きな期待に対する責任と早期完成への決意。

この二つの思いを繋ぐために様々な活動を行って参りました。

現場学習会

吉浜地区運動会参加

通学時見守り

事務所開きへの招待や戸別訪問による真摯な事業説明に始まり、小中学校への出前授業の実施、先生方の事前見学会を経ての児童・生徒による現場学習会を学年毎に複数回実施したことや、登校時の見守りを行ってきたことで、子供達との絆が生まれ、その繋がりが大人達にも影響し、地域の現場見学会の実施・地域歴史勉強会の実施等々を行うに至り、今では常に学校行事・地域行事・祭典に参加するようになりました。

吉浜道路は、PC橋と、トンネルで構成されています。

越喜来高架橋施工状況

吉浜高架橋連結式集合写真

橋の連結式・トンネルの貫通式では、参列した多くの地域の方々より『地域の、そして自分達の道路』の工事進捗を心から御祝いして頂き、その感動には心が震えました。

工事終盤、地域の一員として品質の良い構造物を完成させ、地域の方々に託せるようこれからも安全作業で取り組んでいきます。

川田建設㈱・
㈱安部日鋼工業・
日本高圧コンクリート㈱特定JV
所長　阿久津　豊

#005 Column

失敗から学ぶ

1. 失敗は神が用意したもの

野球の野村克也監督が「勝った試合から学ぶことはないが、負けた試合から教えられることは実に多い」と、いつぞや語っていたし、ある先哲は「成功は人間の表側を飾るにすぎないが、失敗は人間の内面を豊かにしてくれる。失敗は人間の成長のために特別に神が用意してくれたものだ」とさえ説いていた。

その意味で、「事故を単なる負の遺産とするな。失敗は皆の共有財産なのだ。事故の教訓を後世に伝えよ」の趣旨に立って、JAL安全啓発センターに御巣鷹山で墜落した事故機の残骸が、また三菱重工㈱にタービンローター破裂の残骸が、それぞれ展示されている意義は極めて大きい。

そう言えば、筆者自身もまた1973年、土木学会誌特集コラム「私の選んだ5冊の本」の中に「コンクリート構造物の破壊事故は教える」（樋口芳朗監）、「コンクリートしくじり百話」（近藤泰夫著）などを挙げ、失敗事故の経験から学ぶことの大切さを特に訴えたことを、ふと思い出している。

2. わざと失敗させる教育

ところで、コンクリート工学誌2014年9月号で宮川豊章京大教授が、「講義に際し2年前から、優しい理解しやすい教科書をやめて“難しい材料学”へと舵を切った。学生がつまずく方向へ敢えて導き、本質を真に理解させるように計（はか）らったつもりであり、知識は自分との関係が有機化された時点でこそ知恵になると考えたからである」と述べ、また、「近年、コンピューター・IT時代になって、システムというブラックボックス化したツールを介して仕事をするようになった場合は、人間の方に自らが手を下したという充実感が乏しいだけに、失敗が身に着かないのではないか」という趣旨のことも洩らされていた。

人間の寄与率が下がった分、失敗の衝撃は小さい訳で、前の失敗を次の成功へ導く反撥起爆剤になり難いのは道理で、特に、「人間に与えられる最高の勲章は感激であり、それは自らが流した汗と涙の量に比例する」と確信する筆者としては、尚更、感動のインパクトが弱い場合の帰結として「さもありなん」と共感・危惧する次第である。

3. 文明の進歩と人間の退歩

さて、近年の文明の発展には目覚ましいものがあるが、人間の方は進歩するどころか質的には寧ろ退化の様相であり、ホモサピエンスがアフリカに出現して20万年にもなるのに実に由由しいことと言わなければならない。

文明の方は時空を越えて影響・刺戟（しげき）し合い、縦横無尽に切磋琢磨して着々と発展していくのに対し、人間の方は、「人間は他人の体験は奪い得ない」という必然の故に他からの寄与分が累加されず、それぞれに“自分なりの成長”をするにとどまり、すなわち、フラットな時間軸上に零点回帰型の各自の曲線が連鎖するだけで、人間総体の基軸の底上げは叶わないことが、「人間は進化する動物」と言われながらなかなか進化を遂げ得ない理由かもしれないと、ふと考えたりもする。しかも、IT時代になって失敗が人間成長の糧にも成り難いとあっては、その対策は至難だが取組むべき喫緊最大の課題であろう。

さて、PC工事においても近年思わぬ事故が発生している。失敗に学ぶことは勿論、自慢のPC技術を更に深化させなければならない。

聞く耳を
もてば遠くに
ホトトギス

山下接穂

九州工業大学名誉教授
渡邊 明